

御先祖記 五

御先祖記五

自慶長十九甲丑歳

元和元乙卯年至

一 秀頼の近臣に片桐市正と云者あり、慶長三年太閤秀吉公御薨去に際てひそかに小出播磨守と此片桐市正を召て被仰けるは我天下を治武功と云栄花と云不極と云事なし心に名付と云事もなし、然共今秀頼か後見に可頼者なし、武勇あれは分別なく才覚武勇おとれり武勇分別かねたるは又心計かたし、多人の中に汝等兩人は秀頼の大事を可見捨者に非と思へり、然に依て汝等も頼に思ふなれは秀頼に忠を尽し義の道を忘へからず、両雄は必争事ありかまへて公義私をかえり見る事なかれ、若野心の者あり八一戦に一命を借へからず運尽きは大坂の城を枕と定むへしと被仰置他界なり、小出は

去比病死して片桐壱人残り故に片桐日々に出仕して諸人の尊拝を請付て漸おこる心出て秀頼公を守たて申ことをしる、爰に大野修理亮治長と云者有是は秀頼公の乳母子にて其威勢片桐におとらす然共酒也を愛して約なる礼義をしらす、片桐か奢の出たるを悪んで弟大野主馬介治房と渡部内蔵介糺と内々評しけるは近年関東の御はからいを見るに御当家を亡し給はん御たくミ顯然たりそれをいかにと云に当家の者共を事を繕関東へかひ下し給ひ今残る業も皆子供を人質として取置るれは行々八我等も関東伺公の者と成へし、其後八片桐をも関東へ引入給ひて秀頼公を八此城を追拂給ひ御腹召せ申にて有へければ御謀叛を思召立一戦に運を御算候様に、いさや此事を母公迄申上候半と評して大野の母

大蔵卿・渡部の母正永を以悉く母公へ申達けれ八秀頼公も聞召いかにも至極の諫成へしとて忍々に牢人を召抱勢を催る也

一 板倉伊賀守勝重は京都所司代にて有けるか大坂の様子を聞京都に居たる牢人と心を合大坂へ指下し新参奉公人となし大坂の謀叛の様子を細に聞届、扨又西国より登る米をそろくと留て大坂に有米を伏見へよせひそかに関東へ注進仕る

一 慶長十九^甲年二月五日申刻大坂天主から黒氣夥数立て天におほへり、外様の人々是を見て天主こそ焼失する八とて周章懸付るに殿中の人々も是に驚て天主にあかりて見れ八火事にて八なく煙のことく成物なひきおほへり、其比朝鮮人に李文長先生と云博学なる儒者ありしか、是を占ふに大坂御運

の未成と^云

一 其比秀頼公大佛建立有て供養可有との時、板倉伊賀守方より片桐市正方へ申遣ければ今度大佛建立の棟札の儀并鐘の銘に付大御所家康公御腹立有、明日の供養を可相延と云片桐申けるハ供養既に明日に極し間是非なく執行可申候若御腹立甚敷ハ某切腹可仕よし申けれ共板倉達て留ける故供養を延て大坂へ歸る

大佛建供養ニ付秀頼公モ上洛可有カト評定ノ折節織田上野介信包モ其ノ時ノ評定人ナリシカ秀頼公上洛不可然ト僉議極リテ退出ス、其後血ヲハイテ死ス、是ハ信長公御弟也

一 六月下旬関東より片桐市正を被召被仰含候、上意ハ秀頼浪人を集戦法を習はしむる所さらに合点なし秀頼いかなる所存そと被仰下、片桐申上るハ私曾て不存儀にて御座候、大野修理を召して御尋被遊候へと申上るに付大野を被召下、此段御尋被成太儀に関東迄下候とて五千石の加増を被下御返し被成御軍法の

第一なり

一 秀頼公牢人を抱へ戦法をまなひ大坂へ米を入れる為申合、又関東へ片桐を被下る、本多上野介正純片桐に向御謀叛の企其聞へ有るに付て御機嫌不宣、先在寺被致御機嫌を窺へしとすゝむるにより片桐在寺す、秀頼公此事を聞召無覚東思召大蔵卿と正永と二人を重て駿河へ下さるゝ、御前へ二人の女を被召被仰けるは大樹秀忠は秀頼の舅なれ八親成、太閤末期に際て秀頼の事を被頼置上八少も疎意に不被思召只秀頼とむつましくお八さん事との三願ひ思召るゝ也、大坂にて少壯の輩戦法をはらひ候事武の嗜さも可有儀なり、いかて御隔心可有とて二女を大坂へ歸さるゝ、其後片桐を一兩日被留傳長老と本多上野介とを以被仰下けるは秀頼大坂に兵を集逆心を企事以不儀也、大樹と秀頼は親

子也、如此個の不儀あらハ我よはひかたむきたる没後をも不待して不和ならん事必定たるへし、片桐宜く計ふへしとの上意なり、市正申上るハ、私関東と大坂との御中を調申と云共自分はいかてはからひ可申候、公命を承候て秀頼に申候半と申といへ共是非片桐才覚を以て可申の由上意重により、然は秀頼反逆無御座印に母公を関東へ下候か秀頼下被申聞か又大坂の城を明渡秀頼国替被仰付か、三つに一つ合点仕らせ候而和睦を調候半と申上るに付、片桐にも御暇被下候、片桐夜を日に続て江州水口にて大蔵卿と正永とに追付、上意の趣又自分の申上たる儀を語る、二女大に驚き大御所我等に直の御意片桐か言葉と大に相違也、是を思ふに、片桐我身を立んために秀頼をないかしるに仕ものとして、九月十七日伏見より急き舟にて大坂へ帰り今度の

様子不残申上、家康公縦御差図成とも一往も二往も御断可申上処に片桐か計として三つの儀申上る事正正は逆心と存候由申に付、母公聞召、此事広く沙汰すへらからすと被仰候、十八日に市正大坂へ帰着し右の趣申上る、母公聞召、御返事をは思案して宣ふへし先帰宅仕休足いたし候へとて片桐を御返し候、其後大野修理を被召、片桐か今度和儀を調るに三の品を私に定事甚以尾籠也、我等は浅井備前守長政か娘たりといへとも関白秀吉の妻にて秀頼の母也、織田右大臣信長には姪也、何そ今とても関東へ下り恥をさらさんや、如斯ならば中々一戦の内に命を捨んと宣ふに付て、大野本より片桐と中不宜故、此次而に市正を失んと思ひ、仰尤に候、早々片桐を誅られ義兵を揚げ運を天に任御覧候へと申なり

一 九月廿三日市正を大坂の城へ召寄、可被誅とて織田常真北畠信雄
卿ノ御事

信長公
ノ二男へ相談有処に常真申けるは、今駿武の両御所へ向て弓を

引れん事中々思ひよらさる事なれば、片桐を被誅事も思ひ留
り候へと諫給へと承引なし、依之常真より片桐に此趣を告ら
るゝ、市正虚病をかまへ伺公を留る、此事を聞、常真の家頼面々
乃主人の方へ集る、今木源左衛門と云秀頼の家臣市正か宅へ来る、片
桐か心底を問、市正か云、我いとおしき妻子を捨て何そ関東へ心
を可寄や、源左衛門か云、然ら八今城門の内六ヶ所八貴方の驚固(警)なれ
は其門より本丸へ入讒人を討殺、秀頼公関東へ無相違由被申候へ
し、若関東の御憤深く八兵を催し一戦に雌雄を決すへしと
云、市正か云、其方便何とも難叶、我二心なき事を諸人不可知、讒
人を亡さん事秀頼の御心にたかふへし、源左衛門か云、古を以て今を

思ふに伊尹八大甲を桐に籠めて政を務て其後大甲を君とすといへり、一旦君命に背ても忠功末に顕へしといへは片桐か云、昔と今と同からず、伊尹八聖人なり、我は凡人也、只切腹して無誤を顕へし、駿公反計のために大蔵卿を正永に被仰候事と我等に被仰事のたかふ事御智略の尊慮我等か運の極なりといへ八源左衛門か云、然八妻子を人質に奉り給へ、市正八是に応ず、源左衛門秀頼公へ参り一々申上る、秀頼公よりも意根に不被思召との御自筆の誓紙を給りて市正にとらせける、大野修理治長木村長門守重成秀頼之乳母子渡邊内蔵介糺、秀頼公と片桐か和睦を聞て大にいかり秀頼の命をも不伺、九月廿五日甲冑を帯し兵を卒して市正を責むとす、片桐か宅へ懸集て四方を堅て待とも寄手も不懸、又片桐打ても不出、廿八日市正逆心なき

におゐて八人質を可出との事に付、一子出雲守を大坂へ奉る、然共
讒人止さりけれ八秀頼の差図に任せ、十月朔日片桐市正且元・弟
主膳元重茨木の城へ引退く、大野修理か子信濃守を八市正か
方へ渡し、市正か子出雲守を修理方へ互に人質に渡置取かへ
立退なり

一 片桐大坂を退て後、秀頼一向謀叛を企て軍士を集め大坂・堺
尼崎にて兵糧を買大坂へ籠る、四、五日の内に廿万石を調天満
舟場より材木を取入て、四方に惣門を構、大野修理かはからひ
にて仙場を要害に構へ堀をほり土手を築、八寸角を柱にし
て屏をかけ屏うらに五寸角を打付、矢狭間をしけく切十間
に一つ宛矢倉をあくる、大坂七組の内青木民部小輔・伊東丹後守
申けるは籠城の広八持にくきもの也成に仙場を要害に用る

事不可然とそしる

一 大坂の城の西は海北八大河、東八沼、南一方陸地なれ共城八高く
地下りにて日本無双の名城なるを如此構たれ八日本の武士か
集て攻るとも可落共不覚とて、是を頼に籠めらるゝ、秀頼
公の心そはかなけれ、今度大坂へ馳来て籠らるゝ名有将
は真田左衛門尉幸村・長曾我部宮内少輔盛親・毛利豊前守勝
永・明石掃部全登・仙石宗也・後藤又兵衛基次
元八黒田筑前煮守郎
等也、大野修理治長
姪聳ナリ

一 京都を八板倉伊賀守守護して密しかりければ大坂より打出る
事不叶して片桐か城茨木へよするといふ聞へ有けれ八誰をか可
遣と案し煩ける時、村上三右衛門其比京都近所の御代官なりしか
生国丹波の地侍を催し人数を作り茨木の城の加勢として向ふ

一 和泉の堺には政所として芝山小兵衛を関東より被指置処に
大坂より赤庄内膳・槇嶋玄番父子を遣し、今井宗薫と云関東の
恩顧の者を召捕大坂へ遣す、芝山大に驚き堺を逃る、片桐茨木
にて是を聞、柴山か難を救んとて兵十余輩を茨木より出す
此者共尼か崎に至て渡海の舟を待、尼か崎城に八建部三十郎政勝
是を守る、然共微勢なるにより松平武蔵守利隆か臣池田越前池田勝入
二男ヲ三左衛門輝政ト号ス、此妹ヲ六條門跡ノ家臣下間少進ト云者ニ嫁ス
池田越前八下間カ子此腹ナリ、武蔵守利隆八三左衛門カ嫡子ナリ南部越前を尼
か崎の加勢に被指置、是八武蔵守と建部と縁者成により被仰
付也、片桐か郎等に多羅尾半左衛門と云もの堺に妻子を置ける故
に小船を請て一人乗出し夜半に堺に至て柴山はや逃たるを八
しらて今井の家に入、赤庄・槇嶋是をとらへんとす、半左衛門勇者にて
討手を切払今井の家に火をかけ自害す、去程に片桐市正軍勢

を催し尼か崎迄来て渡海の船を乞、池田・南部か曰、片桐八大坂の近臣なり、表裏のあらんも不知とて門に不入、片桐力なく尼か崎を去る、大坂にて是を聞大野か兵米村六兵衛・同治太夫・同市之丞・北村三右衛門を以て十月四日神崎にて片桐と戦ふ、片桐討負伊丹の城へ入らんとすれ共不叶してほうくの体にて茨木へ引退く、家臣牧次右衛門父子・十河久兵衛・河路五兵衛討死す、大坂の兵に八米村市之丞・日比加左衛門討死なり

一 慶長十九年十一月十一日大御所家康公駿府を御出馬、大樹秀忠公は廿一日に江城を御立被遊候、江戸御留守に八越前少将忠輝卿松平下野守忠郷本氏八蒲生ナリ・鳥居左京亮忠政・内藤左馬介政長に被仰付、福嶋左衛門大夫正則・黒田甲斐守長政黒田如水軒力子・加藤左馬介喜明・谷出羽守・平野遠江守を武府被留置、忠輝卿に被仰置ける

は、福嶋・黒田・加藤等八皆太閤重恩の者ともなり、大坂にて我ら軍利不有ときに八謀叛を企へき者也、はやく召よせ誅すへしと被仰置ける、藤堂和泉守高虎には大和勢を被付、大坂の先手を被仰付、其時諸人申ける八、藤堂八太閤の恩士なり、其心難計御譜代の侍に先陣被仰付候へかしと申ける、藤堂八無二の士なり
二心有へき者にあらずと上意なり

一 十月六日・七日御下知に随て中国勢馳上る、松平左衛門佐忠繼

池田三左

衛門二男武蔵守利隆弟ナリ

神崎川に着、大坂より番船をかけて爰を防く、忠繼是

を押払、松平武蔵守利隆・其弟左衛門佐神崎川を超たる由聞、先をせられ口惜とて中嶋の瀬を越むとす、此所八大坂七組の兵に織田源五郎有楽入道長益加りて河辺に備て利隆川をこへ八討とらんとす、其時城和泉守武蔵守に申ける八、敵大軍にて先立而

備ふ、是主戦なり、味方微勢にて大河を渡ん事、是客戦也、河を越へからすと制す、然共武蔵守いらつて川を越んとす、和泉守か曰、大御所の命を請て爰に有我か云事八君の命なり、用さらむ八不忠たるへしと云けれ八、利隆も河を越る事あた八す、其内に敵大坂へ引入、戸田肥後守正利・花房志摩守重勝・同助兵衛等川を渡て敵数十人討捕、武蔵守手八敵に不合、又石川主殿頭忠綱神崎川を越て中嶋に至る

此時分大坂七組ト云シ八堀田凶書・青木民部一治・野々村伊豫守雅春・速水甲斐時之伊東丹後守・毛利豊前守勝永・片桐市正且元七人ナリ、太閤秀吉ノ御時七組ト云シ八

右ノ内速水・毛利・片桐ヲ除テ真野藏人・郡主馬・中嶋式部氏種三人ヲ入テ七組ナリ

一 越前少将忠直卿

結城中納言秀康卿ノ嫡子
越前一白殿ト云シ人ナリ

二万余騎、松平筑前守利常

加賀大納言利家男肥前守利長
ト云シ人ナリ、後二号小松守中納言

三万余騎にて上洛被致、両御所御跡より

松平陸奥守正宗・佐竹義宣・上杉景勝等の奥州勢もはせ

のほる、加賀八大納言利家・年長・利常

一 二条の御城にて大坂の責口の人々被定

東の寄手

佐竹右京大夫義宣

上杉中納言景勝

本多伊豆守忠朝

真田河内守

浅野采女正長重

松平丹後守

牧野駿河守

堀尾山城守

京極若狭守高次

同丹後守高知

酒井宮内少忠雄

南の寄手

松平筑後守利常

越前少将忠直

井伊掃部頭直孝

藤堂和泉守高虎

生駒讚岐守

尾張宰相義直

松平陸奥守正宗

蜂須賀阿波守至鎮

浅野但馬守長盛

福嶋信濃守勝茂

寺沢志摩守

松平土佐守忠義

松平宮内少輔忠雄

同左衛門佐忠繼

石河主殿介忠綱

北の寄手

向井将監忠勝

千賀与八郎政次

九鬼長門守守隆

小濱久太郎

福嶋備後守

森右近忠政

松平武蔵守利隆

本多美濃守忠政

本多周防守

黒田左衛門佐

有馬玄番頭豊氏

片桐市正且元

片桐主膳正元重

一 十一月十五日大御所二条の御城を御立、大樹秀忠公八伏見を御出馬被成、大和国法隆寺に着御、十七日に関屋越を被成、摂津国住吉郡に入給ふ、法隆寺より大坂へ八亀瀬越近かりけれとも昔上宮太子の宣置けるは、戦場に表向者なり共馬のひつめに懸て往還すへからすとの掟をたかへす、遥なる関屋へ懸り給ふ、十八日

大御所着御被成候へ八大樹八平野より御出合、住吉にて御軍の御
御評定被遊

一 大坂にては両御所御馬を被向を聞て口々を請取かたむ

仙場 大野修理亮治長 大野主馬同道犬二人力兄ナリ、母八大蔵卿

し 橋織田左門雲正寺 織田有樂長益ノ子ナリ、武蔵守父ニテ南ノ手ノ大将ナレトモ御当家へ
カヘリ忠ナリ

其次 南條中務忠成 南條伯耆守子ナリ、籠城ノ請取場ノハシ矢クラニ目ニタツ指物ヲ立シ事
アリ、其トキ雲正寺八關東へ心有ト見ヘテ我持口ヲシラセンタメ目ニ立指
物ヲタテ候誅セラレ可然ト申上ル、秀頼愚ニシテ南條并家人三十四人ヲ誅シテ南條力請取場ニカクル雲正寺
御当家へ返忠の心アル故ニ中務ホトノ勇士ヲ失テ城中ノ力ヲ弱メント計シヲ其方便ニ乗シハ秀頼
人ヲ不知故ナリ

基次 渡邊内蔵介糺 母は正栄ナリ

塩屋町口堀他掃部 堀田若狭守子ナリ、父若狭守八此節御当家ニ有故 大
坂落去ノ後御当家へマイリ後号兵

基次 薄田隼人

基次 石河肥後守 石河玄番カ子ナリ、仙場口マテカラホリニ水ナシ町場五十間ヲ請トリ
十二月四日越前衆屏ウラニ付乗取ントスル時口広クシテ防カネタ

ル故同五月二十五間堀田掃部二渡ス

是より水堀 小岩井五左衛門秀頼ノ厩別当也、山川帶刀・北村次郎兵衛ト云浪人随フ

八丁目 長曾我部

基次 明石掃部

基次 京極備中守

土橋口此さきに真田か出丸有、此外平野口・大和口をも西々請
取かたむるなり

一 十二月廿日浅野但馬守異本二松平宮内少トアリ蜂須賀阿波守至鎮穢田村を責る

城兵明石丹後守金延是を捨て城に入、蜂須賀穢田村に移る

一 廿一日の夜住吉にてあやしき者藤堂陣を尋ぬ、藤堂八天王寺

に有、弥あやしミいましめて問に秀頼の書をもつ、ひらき見れ八

重而申入候、今度其方以調儀両御所を引出此表へ令

満足候、此上東勢と申合不日に駿功可被仕候事なるにを
みて八如約束与行於国、其外望次第可被行恩賞者也

十二月廿一日

秀頼

藤堂和泉守殿へ

此使八大野主馬か家人なり、大御所藤堂を召て件の書を被下
是謀書也、其方我に忠心を尽すを以はかりて君臣の中を隔ん
とする也、何そ彼兒子か謀事に落ん也、去比汝に下知して云
撰津国に発向し働敵を見て早々告へし、其告を聞て我
軍兵を可出と示たるを聞て汝を我に誅させんため此事は
かるにやと被仰、則其使の者をも被下藤堂彼者に秀頼と云
文字を額にかなやきして手足の筋を切、紙に旗になたを絵
書て戸にのせ城外のかたはらに捨るなり

- 一 廿二日松平武蔵守・同宮内少輔異本二浅野
但馬トアリ福嶋近所新景村を破る、同日武蔵守よりとして人二人指上る、是八武蔵守城内へ心を合せ八大国を三ヶ国可与行との謀書の使者なり、廿三日松平陸奥守正宗着陣仕、秀頼和久半左衛門を捕て差上、是も秀頼より正宗を頼るゝ使として東国へ下りけるを下野国小山にてとらへて召連しなり
- 一 間宮権左衛門長崎より着船、是八吉支丹追放として去比罷下高山南坊・内藤飛驒其外彼徒党を長崎より船一倉艘に乗(壘)て南変へ流し申候由言上任る
- 一 廿五日池田越前守を被召、今度尼ヶ崎にて様子無油断神妙の由願御感又大坂と中嶋の間の川深して懸引たやすからねは今日毛利長門守秀就と福嶋備後守に芦菔を

かり鳥羽堤を築、中津河へ流し天満川を干へしと被仰付、各らんくいをうち大竹をひしき、しからミとして大石、大木と取かけ広さ十四、五間につく、極月九日比にことくく築立て尼ヶ崎へ川水をなかさなり

一 備前嶋の東大和川の南の堤を八志貴野と云、寄手八上杉景勝也北の堤を今輪と云よせ手は佐竹義宣なり、此今輪の堤を堀切柵を三重にかまへて大坂鉄炮頭矢野和泉守正倫・飯尾左馬允家貞堅めたるを廿六日に佐竹か手の者堤より忍寄て和泉守を始七、八人討捕、此きおひを以て片原町へ入、木村長門守重成か手より川崎和泉守・上村金右衛門知徳院鉄炮五十腸挺を以佐竹か兵を追払二、三の柵をかへて木村に猶加勢を乞、依之大井何右衛門高松内匠、其外十四人を指加佐竹か兵叶はしと思ひ柵を捨て引退く

處へ大井何右衛門かけ出し鉄炮を透間なくうたする、木村長門守重
 成生年二十三と名乗て進来自身鎧を合すれ八家臣波多野
 兵庫・青木四郎右衛門主におとらしと鎧を合、堀田図書・後藤又兵衛
 基次かけ付る、木村か兵柳右衛門水舟擔入北の堤より横合に鉄炮
 を打かくれ八木村か与力の侍松浦弥左衛門・堀田か兵浅部弥兵衛
 まつさきに懸首を捕、佐竹か兵^{異本二}澁江^{澁谷}・内膳亮手勢を卒し
 て懸れ八木村か兵かけ合つよく戦ふ、木村方にて高松内匠を始
 大塚勘右衛門^{異本二木村討死ノ}・小河甚左衛門・大野半次・日下次郎左衛門・若松市
^{時同死ト有}
 郎兵衛・齊藤加右衛門・山中三右衛門以上八人討死なり、佐竹か小將澁江内膳
^{鳥毛}ノ^縋討死すれ八梅戸^{異本二}半左衛門も疵を蒙り、士卒つかれてひき
^{梅津}
 退き軍難儀に成けれ八後陣にひかへたる堀尾山城守に援兵を
 乞、此場の御目付安藤治衛門申けるは御下知を不伺して人数を

出す事不可然と云、山城守か曰御下知なければ八とて目前にて味方を討せ見物する法や有と、其年十六歳天下無双の美男なるかね勢二千を左右に立て勝ほこりたる木村か勢へゑしやくもなく懸入味方の諸勢は堀こしなれ八懸合事も不叶見物す秀頼も天主に上りて見物の合戦なれ八互二一足も不引首を取もありとりるゝも有組て落もあり指ちかへ死も有、終へき合戦共不見に上杉景勝か兵共堀こしに鉄炮をうちかゝれ八木村か兵平塚左介大井何右衛門左右を下知して引とらんとす、此時大井は堤の上にて鉄炮に当りて死す、堀尾か兵も三千四人討るゝ、木村方には長尾大夫佐久間・牟礼彦三郎各高名有、木村か兵松浦弥左衛門首を持って城中へ集り其時の執筆向井甚右衛門に見せて記さする、然共白井是を不書、松浦いかつてせむれとも猶不記、然所へ堀田か兵浅部清

兵衛首を持って来り、今日の一番首を死といへとも歩行ゆへ遅参の由を断、其時白井、松浦に向て初首に必論有もの也二の首を見て後書つを記す、是筆取の古実なり今軍半の事なれば

一、二を決する事不叶首二つと記して二人の名を書此時古田兵部佐竹力陣へ来テ鉄

炮ニテ疵ヲ蒙ル具ナル事八大坂物語ニアリ

一 同日志貴野へ八上杉景勝向ふ、大坂より八七組の衆に渡部内蔵

介・木村主計宗重・武田永翁・大野修理馳伺ふて戦、上杉か兵杉原

常陸異本ニ水原トアリ七十余歳ノ兵也・鐵孫左衛門・須田大炊・安田下総・嶋津玄番等軍忠う

をはけましける、秀頼の同朋竹田大河弥異本ニ大介トまつ先に進討死

す、父竹田兵介異本ニ兵庫小早川・岡村等も討死す、穴沢主殿介八長刀の

達人にて秀頼の師匠なり長刀を以景勝か兵を七、八人切たをす

直江か兵直江山城守八景勝力臣ナリ小折下外記鑑をもつて向ふ、穴沢長刀をひら

めかし指延て外記をなく、外記鑑捨て穴沢と組かゝる所へ景勝か兵大勢おり重て穴沢を討取、此表大坂の軍利をうしなひ渡辺内蔵介引退て此表御目付安藤治右衛門・屋代越中伊藤右馬充かけ出して柵を破んとする時安藤敵を突、敵つかれなから鑑を切折、其時屋代か子甚三郎十八歳父に随ひ来りけるか懸付て彼敵を討なり

一 本田出雲守守忠朝は部下に備たりけるか佐野に替り今福に伺ふ部下には浅野采女長重・松平出雲守勝隆・真田河内守信吉・弟内記・仙石好俊・秋田城之介実秀・新庄駿河守直勝等守るなり

一 廿九日為勅使広橋大納言・飛鳥井大納言下向・烏丸中納言頭・左馬佐は私の御見廻なり、大沢少将基宿御被露申、同日鶉芳か淵へ松平宮内少輔異本ニ此名ナシ蜂須賀阿波守押よせける、城兵平子主膳・渡部金

大夫防戦す、松平宮内少輔か家臣横川治大夫、平子主膳を討、箕

浦右近・平子茂兵衛を討、蜂須賀か家人森甚五兵衛異本二甚五右衛門・同宮大夫

異本二藤兵衛城兵小川四郎衛門と鑓を合、広瀬加左衛門・木村長左衛門高名あり

薄田隼人は此口の大將なるか廿八日の晩忍て大坂へ帰り傾城と夜もすから酒をのミあくるも不知臥たり、此戦の苦を聞て漸かけ付たれとも早味方敗軍なれ八森豊前守方へ使を立て後話を望けれ共、森承引なけれ八力なく仙場へ引退く、此前薄田に平野を可焼旨秀頼より被申付候を焼おかせすして敵に便を得させし事有しに又此大事の要害を破られてる事冥加の尽し待也、同日成瀬隼人・安藤帯刀を上使として野田福嶋、鵜芳洲にて可然所を見斗浅野但馬守か陣所に可相渡よし被仰出なり

一 今夜福嶋の川口を石河主殿

父相模守八御勘氣ヲカウムリ罷有節也其罪如何危存ル所二先被仰付忝存也

九鬼長

門守向井將監忠勝

異本二政次父八
兵庫忠安ト

押よせ高名あり此河口をは大野修理

か兵小倉右衛門と云者と大坂船奉行丹後と云者の堅めたる所也

一 晦日大坂のかまへ大にして利なしとて天満船場の両所と自焼して

城中へ引取蜂須賀阿波守・松平宮内・松平土佐・福嶋信濃守・浅野但馬守

石川主殿・九鬼長門守則仙場へ入る、土井大炊頭を召て上意に曰仙場

の町へ先手の諸將則時に軍兵を入候処に北のよせ手に今おいて

天満川を渡さるゝ事を御とかめ被成、大炊頭承・城和泉守堅く制し

申候に依て延引の由申上る、上意に曰以前城和泉守を天満横目に

遣し着者共の抜かけを堅く制すへき旨申付たり其掟を守

て川を渡させぬと聞へたり軍法に愚なる者なりと御立腹なり

一 十二月朔日松平武蔵守・同左衛門・佐森右近・有馬主蕃今日辰刻天満へ

入申候由服部権大夫・嶋弥左衛門言上す、今日大野修理か家を火矢を

もつてやく

一 大工大和を召来る四日茶磨山御陳かへ可有、仙場の町屋をこほち御陳屋を可作よし被仰渡候

一 三日松平左衛門・佐森右近を天満のよせ手を除れ仙場の寄手に加へらる天満寄手の陳壱万石に三間宛也、私二日三十間ツ、カ

一 今日織田有楽より本多上野介・後藤庄三郎方へ返状有、其趣は噯の事秀頼へ度々諫言申候へ共、無許容との事なり仰云、此上猶諫可申候用は有楽城外へ出相談可有の由被仰付、寄手竹手把を以城より五、六町或八十町責る、大樹秀忠公近日惣攻可被成の由被仰候処に、大御所家康公仰曰、此城縦外郭を責落たり共二、三の丸を落難し、其故八一年一向坊主の籠たるを信長数万の勢にて三年被責けれ共終に不落、噯をなして城を請取、其後太閤秀

吉多年拵、今又大勢楯籠て八利を得かたし、方便をかへて落すへしと被仰候

一 四月、朝霧の内、越前少将忠直の郎従本多伊豆

異本二
飛驒

同次郎大夫か手

と城の兵鉄炮の責合有、此節石河肥後守康勝

伯耆守康昌カ二男御
勘気カウムリ籠城スル

伯耆守玄番ト
一人二名ナリ

か持口のやくらより石火矢をうたするとて煙硝箱に

火入て矢倉焼る、是を見て越前衆下知をも不待きおひ来て城の内外三重の柵を破て塀際に着、夜明るといなや、塀を乗城中あはてさ八き鎧長刀を以防く、井伊掃部八越前勢と松平築前守の間に有しか、味方だし抜先かけをするそ、懸れくゝと責かゝる、既に塀を乗とらんとせし所に城中近辺の持口の兵共我か持口をあけて防く、依之塀を乗事あた八す塀裏に付たるを、城中の兵は云に不及女童まで石をはこひ矢倉はし

りより透なくなけ打けれ八、こらへかねて引退く、此時四方の寄手一度に責よせな八一方八乗取へきとの後日の評判也越前少将弟松平出羽守直政生年十五歳火おとしの具足に同毛の甲を着し猩々皮の羽織にて真先をかけられしか味方退時跡にしつくと引給ふ、越前の物頭岡部淡路守討死なり、真田か出丸へ八松平筑後守か先手押寄責る、既に乗破んとす、真田左衛門幸村・七郎左衛門強く下知して防之、加賀の兵大河原介右衛門討死す、為上使安藤帯刀馳廻りよせてを制して諸勢を入る、今日井伊掃部頭か郎等木股右京進軍法を背抜かけ仕疵をかうむる、大樹是を聞召いからせ給ひ候時、大御所の仰云如此の時軍法を破る者八少きものなり、攻らるへからすとの御事なり、公の御軍法に妙ありと云は是なり

或書二曰、石河力矢倉ヲ燒事相図也ト有

出羽守直政諸人ニ勝レ進ミ玉フ所ニ何国ヨリ放トモナク鉄炮出羽守ノ胸板ニ当ル
即馬ヨリ落玉フ、郎從周章テ引起セ八郎等ヲ礮トニラミ、常々物ニクルハシキ馬
イミ候ニカヤウナル馬ヲ用サセ落馬ニ及ト宣ヒ、又馬ニ打乗テ前ノコトク進ミ玉フ、後ニ
見レ八具足ニムナイタニ玉ノ跡有ト也

一 横田甚右衛門・間宮権右衛門を召、天満・仙場のよせ手堤を前に当て
鉄炮を打、手負なき様に可仕由被仰付候、住吉の社務に白銀
千両被下、小堀遠江守・別所孫次郎に住吉中狼藉なき様に可相
守の由被仰付候、松平左衛門佐か仕寄にて鉄の楯を拵へ町口のうへ
まで攻よせける、城より大鉄炮にて打立つる故右の楯を捨て
退く、其時河田六郎左衛門と云者一人進ミ出右の鉄の楯四、五丁打
重てかつきて陣へ歸る、其時分今弁慶といふ

一 十日、織田有楽・大野修理か使村田吉蔵・米村権右衛門来り、本多
上野介・後藤庄三郎に口上を申渡す、兩人御前にて意趣を申上る

仰曰、今度籠城の諸牢人御赦免可有、秀頼国替の地望たるへし
また城中の者よせ手に向て鉄炮を不可放、其持口の面々矢文を
以て知すへしと被仰付候

一 十一日、以上意間宮新左衛門・御子田半兵衛・嶋田清左衛門よせ手の陣を
見積り、藤堂和泉守・井伊掃部頭攻口より金堀を入、其穴へ鉄炮の
薬を入指火を以付之、石垣八不申及鉄壁にてもうち崩し可
申候よし言上す

一 阿茶の局ト常光院云京都より下着、是八京極若狭守高次妻秀頼の
母儀と姉妹なる故、嘸被致候様にとて被召下なり、近江浅井備
前守長政娘なり

一 十五日、城中より有楽・修理か右の両使来、其口上八、両御所秀頼
に御如在有間敷との御誓紙被下、抱置候浪人に取せ可申所地

を加恩被成下候、其堀を埋申候共、又母儀を江戸へ下し候共可任上意共也、仰云、浪人に知行を取すへきいはれなし、重て加様の儀申来候共追返し候へと被仰付也

一 備前嶋片桐か仕寄より牧清兵衛・稻富宮内に被仰付て秀頼の母公の御座所へ石火矢を打せらるゝに、其矢倉を打破り女房七、八人打殺さるゝ、織田有楽・大野修理其外七組の面々噺の事秀頼へ諫む、秀頼の仰けるは、吾籠城の砌より運を可開ト八不存亡父の遺言の通此城を枕と可定と宣ひ更に合点なし因茲また長曾我部・真田・後藤・明石申けるは、御籠城の砌御味方可左仕と申候大名いまに一人も下り不申候、其上鉄炮の薬八片桐市正此城を立退候時分塩をませ申候故、薬も早つき可申候南表の惣大将織田左門雲正寺八心替と存候、いかにと申に持口

に鉄炮をうたせ不申候、又目にたつ白吹貫を三度迄染かへ候、一人誤りて鉄炮を放候へ八忽に首を切敵面にかけて置申候、去ル四日敵塀につき既に乗とらんと仕候時は、兵士之儀八不及申、女童迄石をはこひ候に、雲正寺風氣と申候へて家に帰り傾城に頭をうたせ大夜着をかふり伏申候、心を一つにしてさへ籠城八危く候に味方に疑心の多候へは唯此噯をしほに被成御和睦とて時節を御待被成候へ、家康公も当年七十三に御成候へ八天下の御政務を被成候儀も久しからしと存候と諫申に付、母公も噯に傾給ふ故秀頼も無是非、然八よろしき様に計ひ候へと御申候也

一 十七日、大野主馬介か手より伴團右衛門直之大将退にて控軍には伴監物貞安異本二岡長殿には山田五郎左衛門をして蜂須賀阿波守か手へ夜討し首十計討取引とらんとするとき蜂須賀家臣中村右近

のかさしと先登に進む、敵取て返し右近を討取、右近に続き
稲田修理子九郎兵衛十五歳・岩田七郎左衛門・鵜飼七郎左衛門・四宮与兵衛・横井
十兵衛おひかけ何^茂高名あり

一 廿日、常光院・二位の局・あいはの局三人城より来る、兼ての曖の通
大坂本城計残し二、三の丸の堀を埋平城となし可申候、則人質
として有楽か子織田武蔵守頼長・修理か子大野信濃守治徳を
供して来る

一 廿一日、安藤帯刀・成瀬隼人を以諸軍勢を御本陣迄引取せ給ふ
松平下総守忠朝・本多美濃守忠政・本多豊後守康重は城曲輪
したいらくる奉行也、瀧川豊前守・佐久間河内守・山城宮内^{或八}山代^{山代}・山本
新五左衛門八城中四方の門を守り出入を制す、今日九州の軍勢室
兵庫に着船す、薩摩兵船七百余艘、豊前兵船四百余艘、肥後・筑

前都合二千余艘着岸仕候由、本多上野介申上る、仰曰、各可致帰国と上意也

一 廿二日、公の御誓紙の御筆・御血判見奉候へとて大坂より木村長門守重成・郡主馬介良列兩人を被遣る処に、御血判幽にして分明ならず、其時木村申けるハ、母公女儀の心にておろかなれば是を危しまれ可被申候、かさねて御血判を染られ候へと申上る公、木村か望の通に被遊後日に木村を御感し被成候、城中へ八板倉内膳重昌伊賀守勝重二男
肥前嶋原ニテ討死を被遣秀頼の誓紙を見せしめ給ふ、秀頼誓紙終て宛所の名を問るゝ、此儀兼て板倉に不被仰付候故いかゝと思ひけれ共、大御所と被遊候へと申、其通に認させ公の御前へ參る公重昌を御覽被遊候と誓紙の宛所の名汝に云合さるかいかゝ仕たる哉と御尋の時しかくと申上る、公、大に御感し被成候也

或書二曰、京極若狹守ヲ案内トシテ内膳正ヲ被遣時、宛所八大樹工カト宣フ時
内膳申八、大樹ノ儀八不存、我等八大御所ヨリノ御使ト申上ルト云

一 廿四日、茶磨山御小姓衆小屋焼亡、今日有楽・修理御目見申上候、同

諸大名御目見仕次第不同

松平筑前守利常

福嶋備後守

浅野但馬守長晟

福嶋信濃守勝成

細川内記

寺沢志摩守

松平武蔵守利隆

同左衛門佐忠繼

同宮内少輔忠雄

有間玄番頭豊氏

稻葉彦六

京極丹後守高知

松平土佐守忠義

堀尾山城守

加藤式部少輔

南部信濃守

毛利長門守秀就

毛利宰相

吉川蔵人

稻葉越後守

松平安房守

榊原遠江守

本多出雲守忠朝

同美濃守忠政

松平下総守忠明

本多豊後守康重

松平主殿頭

水野日向守勝成

越前少将忠直

蜂須賀阿波守

一 大樹、長谷左兵衛を堺の政所に被仰付候也、井伊掃部直孝今度の働を御褒美被成佐和山へ帰り仕置可仕由にて御暇被下候也

一 廿五日、大御所大坂を御立京都二条の御城へ入せ給ふ、大樹并

尾張宰相義直・駿河中将頼宣八大坂の城破平の中八御在陣也

一 廿九日、富田信濃守信高か豫州板嶋の地十万石、伊達正宗か一男伊達遠江守秀宗に被下、富田事八慶長十八年十月十八日坂崎対馬守重長かうつたへに依て岩城へ追払被成其跡也、秀宗か子兄を大膳大夫と云是に七万石、弟宮内少輔と云に三万石被下二つに分るなり

一 元和元年乙卯正月三日、大御所家康公帝都を御立駿府へ御下被成、大樹秀忠公は廿九日に花洛を御出被成武州江城へ御歸

被成候なり

一 三月三日、大坂にて諸軍勢東西へ馬を馳南北に騒働す、大野修理治長秀頼へ申八、頃日の躰何共心得難く存候、御嘸の後大御所より被仰候は、浪人の頭計を御抱候て其外を八御扶持放され候へとの事に候、剩金銀を被下人を抱へよと被仰付候八さらに心得す候去年御籠城の時より諸大名の心を引見申候に御同心申者無御座候、殊更今八堀を八埋石垣を崩し候て天下を引請御一戦は叶ましけれ八思召留り候へと申、秀頼聞召、汝に誤多し去年一戦を思ひ立へしと進めし八汝也、既に一戦に及て後八運を天に任討死して後世に名を残すへき処に専なき嘸を企しも汝也、籠城の節陣中を廻り軍勢の勞をも補んとせし処に汝古老に評して是を留一つとして法に非ず、此上八とにかく戸を軍

門にさらすより外は別儀なしと被仰候

- 一 三月十五日、大坂より大蔵卿・二位の局・青木民部少輔一治を関東へ被遣
其趣八去年大乱洪水にて三ヶ年国の百姓悉く退散仕いまた
地へ不歸、就夫兵糧ともしく御座候間、御見次被下候へとの事也
仰曰、和平已後諸牢人の扶持を被放穩便の躰こそ本儀なるへし
浪人に情をかけ人を集らるゝ事野心無疑との御意にて御返事
はなし、青木民部儀八御用有とて駿府に留らるゝ、秀頼聞召
此上は弥一戦を催し運に任てともかくも成へしとの企なり
- 一 大坂より人数上セ京都を可焼払との聞へにて洛中騒働す、板倉
伊賀守関東へ注進仕に付、松平下総守・本多美濃守を王城の守護
として被登、藤堂和泉守淀に有て両橋を守る、松平隠岐守定
勝八伏見の城に被置也、大坂にて八伏屋飛騨守・三原石見守を奉

行として天王寺表の井を埋合戦場を作り、其後秀頼仙場へ
出天王寺岡山を見廻り合戦評定也

一 後藤又兵衛基次、大野修理治長に申ける八先日軍の御評定に大軍
を引請て御合戦可有との御事に候、此段我等か心にあはず候、敵八
大和路を越て寄可申と存候、山半分はかりおりさかる所へ味方懸
向て戦候八、十に七つ八つ八勝利得候半と申、秀頼是に被応也

一 四月十八日大御所都へ着御、去ル四日に駿府を御出馬なり、大樹は
廿一日に伏見へ御着被成候、去ル十日江府御出にて両御所より八
常光院を以猶前の御和睦御破り被成間鋪よし仰なれとも
秀頼御同心なし

一 廿六日大野主馬治房一万の兵を卒し生駒山を経て郡山へ焼働仕
是を芳野・熊野の者共大坂へ心をよせんと相図を定如此也、郡山

には当国の先主筒井順慶か末累筒井主殿介与力三十六人を従られ守らるゝ處に敵よするを聞て主殿介逃て己か領ふくすミへ引入後ニコノ恥ヲ悔テ自後害ス浅野但馬守八紀州下地の陣取けるか御下知に依て一里程退く、下地村に八亀田大隈守・上田宗吉に浅野左衛門か鉄砲の者二百計残置、大野主馬八紀路へ押行けるか下地村の関東勢薄く成由を聞物見に八十騎ほと遣す、亀田・上田も物見に出て途中にて出合互に取むすひ合戦す、大坂の兵塙團右衛門一番に鎧を入る、紀州勢八木新左衛門十文字を以突倒首をとる、亀田・大隈八松浦作右衛門と鎧を合内股を突れ退く、上田宗吉八組討高名有互に強き働もなく候へ共大坂勢八芳野・熊野相凶相違故引退也

一 五月朔日道明寺口をさへきらんため後藤又兵衛基次平野へ出張す、薄田隼人・槇嶋玄番重利・其子庄太夫・井上小左衛門時利・山川帯刀堅信・小

河次郎兵衛定勝・古田九郎八・大久保左兵衛是に随ふ、真田左衛門幸村・明石掃部全金・長岡与五郎有門・小倉作右衛門行隠・渡部内蔵介紘・毛利豊前守勝永・伊木七郎右衛門遠雄・大谷大学吉胤・大野修理亮治長二軍として出張す

一 五月三日大御所大和路へ御馬を被迎る、上総介忠輝卿へ軍將を被仰付相随ふ人々には

松平陸奥守正宗 堀丹後守直寄 同 三左衛門直景

松倉豊後守重正 同 長門守勝家 同 十左衛門重能

一柳監物直末 古田大膳重行 分部左京政寿

織田民部信勝 稲葉淡路守通吉 桑山伊賀守貞晴

同 左衛門一直 徳永左馬介寿昌 遠藤備前守常利但馬トモ

藤堂監物高久 水野日向守勝成 同 美作守勝俊

本多美濃守忠政

同 能登守忠勝

松平下総守忠明

西尾豊後守政照

本多左京正利

菅沼織部定芳

神保長三郎

片山村ノ戦ニ討死

別所孫次郎

秋山左近

右トモ片山ニテ討死ナリ

多賀左近

奥田三郎右衛門

御目付片山ニテ討死ス

村越三十郎

甲斐庄喜右衛門

遠山九兵衛

山岡主計頭政家

是等の軍士五月五日和州関屋より河州国府に至る、後藤又兵衛基次八平野に有けるを東国勢の国府山に有も不知血氣の勇に任せて一人の高名を心かけ手勢計を引つれ六日の晩片山小松山に登る、東国の兵今日の先陣八松倉なり松倉河原道筋へ押出敵の松山にあるを見て兵を揮是に懸る、奥山へ陣に有て松倉にも不言合片山のけはしきをのほる、後藤に行合奥田爰にて討死也、下野道二浪人ナリ岡本加介・神子田四郎兵衛・井上四郎兵衛一所

討八松倉片山を廻りて後藤と戦ふ、藤堂監物高久・松倉十左衛門重能鉄炮を合、後藤同勢を以てきおひ懸る、味方少しおくれたるに松倉か先陣取て返し敵を討、堀丹後二の手成か備を崩し戦ふ、仙台正宗か先手片倉小十郎も備を崩しかけ合す、後藤鉄砲にて討死四六歳也此儀不審ナリ後大坂ニテ夜討ノ評云シトアリ・薄田隼人・井上小左衛門も討死、是より大坂勢破るゝなり、榎嶋玄番父子八少々味方を討引退く、後藤か後陣真田等猶陣を堅ふす、東兵の諸大将衆進て戦んや、但し先見合すへきやと僉議に時刻移りて其間に皆退く也

天下平均ノ後此時忠輝卿進ミタマハ又ヲ御怒リ越後ヲ改易被成信州諏訪へ御流シ被成候

一 五月五日大樹秀忠公伏見を御出陣にて藤堂和泉守高虎・井伊掃部頭直孝を先陣に被成大坂表へ押寄らるゝ、此夜は秀頼公諸将を召て敵今日着陣の由其聞へ候、六韜之十四変にも敵人あら

たに集を討又地形を末期ざるを懸る其不意を討と云り、今夜夜討可就哉と御評定有ける所に後藤又兵衛申けるは其不意を討と申も敵人の気を察しひそかに人数を廻し其虚を伺て討を其不意を討と申候、今寄来る東兵雲霞のことくにて山上も山下も人ならずと云事なし、何万より人数を廻し其虚を可討所なく候へ八明日花やかなる御一戦被成、我々も討死仕名を後代に残し候半と申けるか其詞をたかえす、六日の戦にうち死なり

一 六日大坂より道明寺口へ出向ふ人々には木村長門守重成・山口左馬介弘之・内藤新九郎玄忠・木村主計頭宗重を一陣として長曾我部宮内少輔盛親・増田兵太夫宗長右衛門長盛子を後陣として其勢一万大坂よりも矢尾九寶寺に陣取、矢尾堤を東向に静に懸り来る

藤堂か先手渡部官兵衛、藤堂に申八、矢尾と仙場の間四、五十町御座候切所にして大軍懸引不成所と昔より申ならハし候故敵より懸り来る事願所の幸にて候、道明寺表迄手遅く候へハ矢尾海道より若井海道迄四筋のほて縄手有、よつゝに押出大和川の堤にて惣人数を不被留待請一戦被成候て勝利無疑候事と申、依之矢尾海道へ藤堂宮内少輔・同仁右衛門・桑名弥次・渡部掃部を向今一筋へ渡部勘兵衛手勢引つれさんとあの村を目かけて向ふ、残る二筋へ藤堂新七・同玄番西郡村、かやぶか村を目かけて向ふ、藤堂和泉守は始の陣場に馬をたつる

一 若井村に木村長門守勢・藤堂新七・同玄番と戦ふ、味方破軍し
兩人討死

一 矢尾海道へ向たる藤堂宮内・同仁右衛門に高虎力・桑名弥次兵衛・渡部掃部妹聳

矢尾の町へ乗込堤の下迄押寄る、爰には長曾我部備たるか堤の
かけに人数を隠し一度にとつと押下す、藤堂仁右衛門討死、桑名
弥次兵衛八近藤長右衛門に討る、桑名八元長曾我部力臣也
長曾我部此首ヲミテ泪流ス味方破軍す、敵勝
に乗て逃げるを追ふ

一 渡邊勘兵衛か向たるさんとあの村より敵かけ来る勘兵衛かけ合
戦ふ、敵矢尾堤を越て破軍す、かゝりける所に藤堂宮内・渡邊掃
部か勢共八長曾我部に懸立られて崩こほれて藤堂和泉守か本
陣も危ければ勘兵衛さんとあの村の敵を追捨て地蔵堂の西方
より横鎧を入敵を崩さんとするに敵少もひるます勘兵衛を突
退く、勘兵衛又下知を加へてつよく突懸りけれ八敵こらへかねて
崩けれるを矢尾堤迄追詰河原を見渡せ八矢尾と久宝寺の
間の大橋に長曾我部二千計にてひかえたるか先手崩たるを聞て

可引取躰に見ゆる味方を見合するに或は手負又八手をふさけたる者八首実験にとて本陣へ行く、わつかに三千計有けるを左右に立て爰をにかして八いつ長曾我部を討取へし進め者ともとて切て懸る敵味方の小勢を見て真中に取込討んとす渡邊馬を輪に乗廻して一町計引取場の狭き所にて取て返し散々に戦ふ、敵、味方さつと引分れ八其間六、七反を隔つ、勘兵衛か嫡子長平衛八朝の戦に七つの首を取て深入して敵の中に有けるか父か陣を見付懸出来り加る、其外敗北せし味方爰かしこより馳加り二、三百に成、此時藤堂式部八長曾我部か臣渡邊九右衛門を討て重手を負藤堂和泉守より勘兵衛方へ使を立、矢尾堂を焼て引取候への事也、勘兵衛申ける八爰にて長曾我部討不申候て八口惜存候まゝ早々後詰を被成候へと申、和泉守方よりは是非引取候への使立勘

兵衛申八、さあらはに此方を御捨候へ面々かせきに致候半と居し
こりたる内に人数弥重り六、七百になる、漸未刻に成て敵も
引とらんとや思いけん、長曾我部かゑつるの指物も色めきたれば
勘兵衛采幣を取て懸れ八敵久宝寺林へ引取逃るを追て首
数三百四十余討取て平野へ引取かゝる所に大坂から道明寺口へ
向たる人数少々平野へ引入たるを勘兵衛懸て四、五町南へ追払て
平野をかためたりけれ八敵八小勢としらす未の下刻より申の下
刻迄返りかねて居たりける藤堂和泉守しきりに使を立て
引取候へとせめられける故勘兵衛力なく平野四方に火をかけ引
取ぬれ八、敵八夜中に大坂へ入、増田兵大夫八平野にて討死、長曾我部
も夜にいり大坂へ引入

一 若井表へ八井伊掃部頭押よする、此手に八木村長門守向ひたる軍

勢に向て申けるは南より押来る人数八道明寺口へ押と見たり
味方より跡に備を押して前後より討捕へし敵敗軍なく八我
生て不可帰と云て同勢山口玄番・内藤新十郎其勢千余騎を三段
に備て掃部頭に討懸る、掃部か士卒は数度の合戦にほまれを
得たる者なれ八入乱れ戦ふところ見えし、木村か軍忽に敗北し
山口玄番・内藤新十郎を始として木村か郎等河崎和泉・波多野兵
庫・大塚勘左衛門・篠岡右近・佐久間蔵人・牟礼彦三郎・黒木藤七郎・青木
四郎左衛門・平塚能介・早河茂大夫・水谷忠助・松浦左・吉村上十大夫枕を
ならへ討死す、木村長門守も手負て一町計引退槳机に腰をかけ
暫く息を休て有ける処へ井伊か人数透もなく追語たるに井伊か
郎等安藤長三郎馳懸て是を討、大将と八見へけれ共其名を不知、
月額長髪なり御実検の時大御所の仰に木村長門守成へし長門八

常に薰香好し者也、髪を洗て見るへしとてあらひ御覽被成に其水芬々として麝水のことし行年二十三と云、山口左馬介は木村か妹聳にて死八一所と常に契りし調をたかえす同所にて討死也、山口修理重政・同伊豆守重俊八公の御勘気蒙り井伊か備もかり罷在候か此戦に討死なり

大坂にて先陣長曾我部、二陣木村長門守ト定メラル、所ニ木村申八、長曾我部八度々ノ軍ニナレ玉ヒテ先陣モ不珍候、加様ナル功者ヲ後ニ備サセテ合戦仕候ハ、我コトキノ若者モ合戦イタシヨク候ハン間、某ニ先手ヲ被仰付候ヘト達テ望申ユヘ長曾我部シサイニ不及先陣ヲユツル所ニ人数ヲ押出シテ敵ヲ見テノ後木村長曾我部ニ曰先陣ヲ望得タリトイヘトモ敵ヲ見ルニ井伊掃部ハ二陣トミヘタリ井伊ト防戦仕度候間貴方ハ藤堂ト戦玉ヘト云、長曾我部申ケルハ備ヲ不立前ナラハ何分ニモ若キ人ノ望ニ可任候ヘトモ最早夜モ明備ヲ働スヘキヤウモナシ備を働サハ忽チ利ヲ失フヘシ思ヒ留リ玉ヘト再三トメケレトモ其内ニ早木村力勢ヲ掃部方ヘクリカクル井伊力軍兵本ヨリ敵ノ色ヲシル者ナレハ木村力備ヲ立替ントモメルヲ見テ取力、リケレハ木村忽利ヲウシナフ

一 東兵茶磨山にての先陣八越前少将なり、手の郎等には本多

伊豆異本二・同次郎大夫随之、其比小笠原兵部大輔秀政岡崎三郎信康娘ヲ妻ニ被下候・同

信濃守忠備・同右近忠政・本多出雲守忠朝本多中務忠勝二男
美濃守忠政弟也・榊原遠江守・

藤堂和泉守・井伊掃部頭なり、大坂東南は大樹御陣也、先陣は

書院番、一番水野隼人白纒、二番青山伯耆守黒母衣、三番松平越中

守鳥毛半月右の御先手八松平筑前守守也、手の郎等山崎長門入道

閑齋・本多安房守等従之、続て本多伊勢守・片桐市正・同主膳正・宮

木丹波・蒔田権之佐・石河伊豆守等也、大樹御先手水野・青山等旧冬

より武蔵を争ひ、加賀の左備本多安房守備を東に寄る、依之二

番の青山組透間を見て押出して水野か備に相ならひ互に武

勇を励さんとす

一 本多出雲守八旧冬玉造口に向ひけるか、前に深沼有て馬の足不立安

由申上る、公の御意よからず、是を悔て兼て有けれ八、六日の夜に入

小笠原兵部か陣へ行て、榊原か不戦後軍の働なく今以悔しき

事也、敵の陣をさへ見うけ候八、一番に懸入討ち死可仕ものなとと
かたる

出雲守力攻口ノ沼ハ浅カリツレトモ先登ヲカケテ乗込シニ深沼トモ不言進タルト
後日ニ人口ニノラン事ヲホツシ、仕寄ノ場所ヲ御尋ノ時沼深キヨシ申上ル、其前
ノ夜井伊掃部頭出雲守力陣所ヲ通トテ乗タル馬ケシトシテ沼ニ入タルニ浅シ
去間其座ニテ掃部申上ルハ出雲守仕寄場ハ浅ク御座候、先夜人ヲ遣(遣)シ深
浅ヲ見テ候ト申上ル、其時仰ニ曰掃部八人ノ仕寄ノ場ヘサヘ念ヲ入是ヲ知ル
出雲守ハウケ取ノ場サヘ不知ハ油断ノ由仰也

一 七日早旦大坂より茶磨山へ先陣真田左衛門尉幸村也

異本ニ福島伊豫守
同兵部少ト有

天王寺へ八毛利豊前守勝永

異本ニ真田左衛門伊木七郎右衛門ト
有、毛利豊前守八庚申堂前へ寄ト有

岡山表へは大野

主馬七組衆を同勢として押来る、大御所より本多三左衛門・坂部三郎
兵衛・久世三左衛門を物見に被遣候処に、午の刻に及て本多出雲守・
小笠原兵部大輔・子息信濃守・同大学 後二号
右近ト云合ると八なけれとも
先登に進む、敵毛利豊前守か先手福嶋伊豫守・同兵部少輔、豊前
守か勢を合て突懸る、松平丹波守軍兵を以伊豫守兵部少をたす

けんとす、雲州申ける八、兼而討死と極候間我死ての跡に八ともかくもとて敵陣へかけ入討死なり、大屋作左衛門と云者随之、出雲守か兵窪田傳十郎・大原物右衛門・柳田左馬・山本只右衛門・小鹿主馬・小野勘解由・石河半弥・中根権兵衛・加藤忠左衛門其外十四衆うち死す、松平丹波も続てかけ入、自身太刀を援て手をくたき既に討れつへかりし時、従者近藤兵右衛門かけ入て危き所をすくふ、丹波も数ヶ所疵を蒙る、家人九人討死す

一 小笠原兵部八昨六日若郷表にて敵敗北の時、横合に入可討とせし時前に沼有ていかゝせんと僉議の内に敵引取手に不合上聞の評議不宜聞、討死を定天王寺の敵の中へかけ入秘術と尽し戦重手を負、陣屋へ帰り死す、金子と云歩行侍一人従之、子息信濃守は旧冬大坂の御陣に罷登候に付、今度八信州松本の城に被残置、父兵

部を御供に被召連処に忍ひて登り父か陣に加りたるか、とても御軍法を背上八として先登をかけ同性主水(姓)と同討死す、兵部か末子大学忠政十八歳父兄の討死を不知渋谷縫殿・浅香角兵衛歩行三人を随て先に進むに敵なし、後に馬煙の立を見て家人共申八、あとに軍有と見へ候、引返し給へと云ければ、大学なんそ跡に敵可有とて猶先をかけ城中へ乗込、敵のひかへたる中へ入て敵と組て落、大学既に危所へ渋谷かけ付上成敵を引のけ首を討主人をすくふ

一 真田左衛門大野修理に向て申けるは、明石掃部八仙場に有間境の道をへて旗をまき急き茶磨山の南へ人数を可出と被申遣候へ、此時我等八上道よりかゝつて可軍、然八修理人数をも同勢として可被出と約束して茶磨山を後に当て備を立る、毛利豊

前守来て爰かしこに備たて茶磨山の東へ足輕を出し鉄砲を打する、真田毛利に申しけるは、大野修理と如此の方便を定相図の期を得候、其時一同に軍を初らるへしと云八、豊前も尤なりとて軍使を立て足輕攻合を留といへ共猶以人数かさむ、真田是を見て大にいかる故豊前自行て漸責合とむ、然とも明石もいまた見へす後詰も不来、其内東兵の人数かさみ備の色しゝらめはいさ一戦を始討死せんと嫡子大助をよひて汝は秀頼公の御最期の御供いたし候へとて大坂へつか八し夫より備を出す

一 越前少将の臣吉田修理亮申ける八、真田一戦をいかけ来候、あひ懸りに懸り高名し給へと云けれ八、忠直卿采幣を取て軍兵をかせせらるゝ、真田八名を得し大将なるに殊にけふをさいごと思ひ切たる事なれ八、其鋒先の強き事いか成鉄壁も破るへかりけれ八

さしもの越前衆も備なり渡て崩ければ大樹の御先も敗北す
大樹是を御覽被成前後左右に御心を配て御下知をなし給へと
大軍のなひきへたる事なれ八御下知も不用、大樹ミつから御鑑
をとらせ給ひ敵軍へ乗込給八んと被成所を安藤対馬守御鎧に
しかと取付、舎人に御馬の口放すなと云含む、大樹いからせ給ひ鞭
を以安藤か甲をわるゝ計に打給ひてしきりに下知を被成けれ八
崩るゝと見へし軍勢踏留て南の陣もしつまり北頭に人数を
立直す

一 秀頼公は天王寺表へ出張有て討死せんとて桜の門まで御出有
処に、大野修理御前に出、御出馬の事真田にかねて申合候、まつ某
罷向て示合申候方便の首尾をも尋可参とて、御前を立て真田
左衛門か陣へ行、其時刻を尋けれ八明石八未見候へ共軍を待れ候

八ぬ故一戦を取懸候、一時もはやく御備を被出候へと申けれ八、大野心得候とて馬を一さんに乗返れ八、郎等四、五十人修理に續て足はやに真田か陣より引き返す、是を見て昨日の軍におくれを取し兵共臆病神やのかさりけむ、味方敗軍して逃るそと云程こそあれ、先手の働をも不知裏崩して、馬に乗もあり、のらぬも有主は郎等を捨、郎等は主の馬に乗、右往左往に崩れける、城の西門におひ入らるゝも有、或八京橋口、或八大坂又八木津・今宮へおひ崩さるゝ、真田も味方の破軍に力なく堺海道へ出る処を越前少將の兵西尾仁右衛門おひかけて討之、行年四十六歳 真田カ甲八鹿ノ角ノ立物也 御宿越前は野本右近討るゝ也、御宿越前八勘兵衛事也

七月ノ合戦ニハ秀頼公御馬ヲモ出され旗本ノ人数モ左右ノ備二分ラレ討テ出ントシ玉フ所ニ旗本七組ノ内ニモ関東へ返忠ノ者有テ秀頼御出馬有八旗本へ切力、リテ秀頼ヲ討捕関東へノ忠ニ致サントスル者多キ由專サタ有ニ付、秀頼八桜ノ門ニヒカヘヒヤウタンニ御馬印ヲ津川左近ニ御預ケナサレ去年藤堂和泉守カツキタル山ニ馬印

ヲ立ラレ旗本左右ノ備ヲ天王寺石ノ鳥居ノマヘマテ出ラル、ナリ、旗本右備ノ大将ヲ八佐々孫介ト云者也、是八関東家ノモノナレトモロウ城仕也、兼テ大坂ノ城ヘ火ヲカケ申サント家康公ヘ申上ツレトモ、イカ、仕タリケン、火ヲモ不付真田一戦ニトリムスヒ候ト馬引ヨセ乗候故此備ニ有ケル人々申ケルハ、今ノ時ニソソテハタト厩馬ニ乗トモヨリ立テ備ヲカタメヨリ敷テ敵ヲ待ヘキトキナルニ馬ニ乗ル、事イカニト申ケレハ、此所地ヒクニテ先手ノ働キミヘス候故馬ニ乗候トテ終ニヨリス、其折フシ大野修理、真田力陣ヨリ引返スヲミテ味方コソ破軍ナレトテ一番ニ逃ル故、此備ヨリクツレテ惣崩ニナル、サテ落去以後ニ大坂ヘ火ヲカケ候トテ偽ヲ申上又アシキ様子モ有ケルカ終ニ八佐々孫介ヲ八御成敗被成候也

一 大野修理八秀頼公の御前へ参真田か御返事申上る処に、真田か嫡子大助御前に有けるか味方ハ破軍と見へたりと申内にことく崩れ来りけれハ、速水甲斐守此上ハ御出馬有とても可叶共不存候、御本丸を御かため時に至て御腹可被召と申上けれハ秀頼公千畳敷へ入給ふ、此節の事なれば軍兵多しといへとも矢さま配りすへき様もなくあきれ果たる計にて何やうにもたつへからず、上を下へとこねかへし詮なき事なればなかく人数を不可入と桜の門を押たつる故に大坂の軍兵城へも得不入、敵にも

不向、命をのかれんと計にて心々に落行をおひかけ爰かしこにて討取、郡主馬良列八関ヶ原一戦の後諸大名より過分の知行にてまねかれけれども、一旦の欲にふけりて秀頼を可捨にあらすとして、終に此城に籠り千畳敷にて郎等をよひ、我切腹する脇指を黒田筑前守方へ持参いたし是にて主馬介切腹仕候由可申とて切腹なり、成田兵蔵・真野蔵人入道・中嶋式部少輔も同所にて腹を切、毛利河内守侍従秀頼正本二秀頼ト有後日に可改・渡邊内蔵介糺も切腹なり、津河左近南おもてより帰て申やう、御馬印を持って岡山へ人数を押上候へ八裏崩仕候故一戦にも不及候、討死と存候へ共御馬印を敵に渡さんも口惜、又いか様の御方便も候半か、於御自害八御供と奉存罷歸候由申上る、今木源左衛門八元来浅井か家臣也、敵早二の丸へ入候、速に御自害被成よと申上懸れ八、然八天主を

開、焼草を籠用意いたし候へと被仰付

一 大野主馬・同道犬・仙石宗也・長曾我部を初名有士も此時に臨て
いか成心や有けん、皆ちりくゝに落行、秀頼の御前には

速水甲斐守 同 てき 萩道喜 津川左近

毛利豊前守 同 長門守 武田左吉 森嶋長次

伊藤武蔵守 加藤弥平太 堀対馬守 真田大助

高橋半平 同 十三郎 土肥庄五郎 寺尾庄左衛門

片岡十右衛門 榎原八蔵 中嶋半三郎 竹田永翁

大野修理亮 大野信濃守 小室武兵衛 中高将監

氏家内膳正

京極備前守 今木源左衛門 別所孫右衛門

是三人者城中よりの御使を仕る

都合二十八人ならて八なし、秀頼余りねむく候程に静に一睡して自害すへしとて御傍の小姓の膝を枕として前後も不知まとるまる、かくて夜もあけ八日の朝の日さし上るに秀頼いまた存生のよし聞召、井伊掃部に被仰付四方をきひしく取巻れて後、二位の局をよひ出し候へ、可尋子細有と被仰付候へ八、片桐か郎等梅戸忠介矢倉へ登り二位をよひ出し申、秀頼公の御台は大樹の御息女なれ八無相違城中出し候へ、さあら八秀頼并母公の御命をたすけ可申との事により大野修理悦御台を天樹院殿
ト云大坂落去以後本多中務大輔忠勝二嫁シ玉フ出し申候と鉄砲を打かけ火を付けれ八元来思ひ切らせ給ふことなれ八豊国の方を静に伏拜ミ、やげん藤四郎と云者脇指にて秀頼自害被成也、御年二十三也、二十八人の人々も思ひくゝに切腹す、母公をもちいしやく仕れ八御供には大蔵卿・郷場局

宮内卿・おあこの御方・右京太夫・おたま六人也、長曾我部八きんやの里にてとらへられて六条河原にてきらるゝ、大野道犬は堺をやきたる罪にて堺の者共申うけ堺の町の入りにはりつけにかけらるゝなり

頸帳

首三千七百五十三

越前少将忠直卿

此内

真田左衛門首
三宿越前首

西尾久作討捕
野本右近討捕

三千二百

松平筑前守利常

八百六十八

藤堂和泉守高虎

六百二十一

松平武蔵守利隆

五百二十五

松平陸奥守正宗

三百六十

京極若狭守高次

三百十五

井伊掃部頭直孝

三百二

羽柴丹後守

二百五十三

本多美濃守忠政

二百十七

本多大隅守

二百八

鳥居士佐守成次

二百六

羽柴右近

百五十二

金森出雲守重頼

百十九

桑山左衛門佐

百十七

小出大和守

百九

加藤式部少輔

百八

毛利甲斐守

百五

本多縫藤介

百二

土井大炊介利隆

九十七	水野日向守勝成	九十七	大関弥平次
九十	菅沼織部正	八十七	堀丹後守
八十	稻葉右近	七十八	榊原遠江守康勝
七十五	那須左京	七十四	本多出雲守
七十三	松平下総守	七十二	徳永左馬介
七十	太田原備前守	六十八	成田左馬介
六十七	小出信濃守	六十八	遠藤但馬守
六十一	古田大膳	六十	浅野采女正
五十七	有馬玄番	五十	松平伊豫守忠吉
五十三	松平豊後守	五十三	松平和泉守
五十二	関長門守	五十	分部左京
四十二	秋田城之介	四十	一柳監物

四十三	和田左京	三十四	松平甲斐守
三十八	千本大和守	三十三	伊王野又六
三十四	蘆駒藤十郎	三十三	平岡平右衛門
三十三	大嶋一類	三十一	岡本宮内
三十一	酒井左衛門忠次	四十四	小笠原兵部
		<small>兵部八討死也 末子大学忠政 力手へトル力</small>	
三十	酒井雅樂頭忠世	三十	青山伯耆守
三十	伊奈組	二十七	牧野駿河守
三十	石川主殿頭	三十	池田備中守
二十七	稻葉内匠	二十四	高力左近
二十三	藤田能登守	十九	稻垣平右衛門
十九	丹羽勘介	二十	秋山右近
二十六	小濱民部	十九	高力衆

六	七	九	十三	十一	十二	十七	十四	十七	十四	十六	二十
遠山九太夫	日根織部	谷出羽守	堀尾山城守	仙石兵部	松平將監	松平越中守	保科肥後守	松下石見守	細川玄番頭	遠山勘右衛門	妻木雅樂
六	七	十	十	十三	二十	十二	二十五	十四	二十一	十三	十七
山崎甲斐守	西尾豊前守	佐久間大膳	稻葉衆家中	山岡主計頭	羽柴越中守	植村主膳	阿部備中守	丹羽五郎左衛門長重	松平阿波守至鎮	新庄越前守	尾里助右衛門

二	一	二	二	二	一	一	二	二	二	六	八
向井半弥	大沢侍従	安藤式部	菅沼主殿	酒井阿波守	水野大和守	六郷兵庫	加藤右近	村越三十郎	堀淡路守	佐久間備前守	藤堂将監
二	一	二	二	二	二	五	五	二	二	四	七
松平右近	松平采女	阿部修理	内藤主膳	水野淡路守	松平越中守	水谷伊勢守	向井将監	奥田九郎右衛門	脇坂淡路守	内藤帯刀	別所豊後守
					前二十七卜有 イカ、						

二	一	二	二	二	一	一	一	一	一	二	一
久世三四郎	坂部作十郎	本多八十郎	永田権八	渡邊監物	松原作右衛門	土屋左助	小栗彦次郎	川口左助	成瀬藤蔵	成瀬豊後守	松平小太郎
二	一	二	一	二	一	一	二	一	一	二	二
石川勘介	稻垣藤七郎	徳永出羽	三枝新九郎	近藤彦九郎	松平与右衛門	安藤与八郎	永井伝十郎	三枝源八	永井信濃守	尾代甚三郎	小山長門守

—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	二
日根長五郎	跡部民部	中山勘解由	駒井右京	兼松源兵衛	服部十兵衛	安藤治右衛門	稔甚右衛門	渡邊兵九郎	石丸權八郎	小沢權之丞	細井金五郎
—	—	—	—	二	—	—	—	二	二	—	—
曾我十兵衛	牧野織部	中山助六	松前隼人	青山石見守	今村彦兵衛	伊藤右馬介	青山作十郎	安藤伝十郎	曾我喜太郎	戸田藤十郎	小沢忠右衛門

—	勝部甚五左衛門	—	新木甚助
—	野々山新兵衛	—	井野次郎兵衛
—	門奈半十郎	—	目長四郎
二	今村伝右衛門	—	戸田山三郎
—	戸田平兵衛	—	大久保新八郎
—	遠藤平右衛門	—	蜂屋六兵衛
—	堀三右衛門	—	戸田又八
—	保々長兵衛	—	木造七左衛門
—	駒井次郎左衛門	—	佐橋次郎左衛門
—	加藤伊蔵	—	加藤久次郎
—	市橋左京	—	今村伝四郎
—	前嶋三十郎	—	鈴木市蔵

—	伊丹佐次郎左衛門	—	大橋兵右衛門
—	戸田数馬	—	渡部半兵衛
—	小野源十郎	—	高藤五郎
—	布施八右衛門	—	押田庄吉
—	中河牛之介	二	渡邊孫三郎
—	朝比奈六左衛門	—	中根権六郎
—	天野甚太郎	—	宮崎左馬
—	加藤権左衛門	—	廣戸半十郎
—	本多伝三郎	—	山上長次郎
二	酒井長左衛門	—	佐橋兵三郎
—	井戸左馬	—	岡部七之助
—	岡部少九郎	—	平岩金五郎

—	逸見小四郎	—	窪田勘太郎
二	坂部久五郎	—	坂部権十郎
—	荒川又六	—	朝比奈孫太郎
—	浅野内膳	三	羽柴勘右衛門
—	坪内五郎右衛門	—	諏訪部小太郎
—	真田半兵衛	—	佐久間信濃
—	小野浅左衛門	—	山本才兵衛
—	天野源蔵	—	逸見少兵衛
—	石尾六兵衛	—	府忠兵衛
—	中河市之介	—	市岡太左衛門
—	細井長左衛門	—	高倉宗十郎
—	大橋金弥	—	小河三太郎

五	一	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一
山口十大夫同心	神尾刑部	名倉兵九郎	森河金右衛門	桑嶋源六	田代養元	井上外記	中川長三郎	山田清大夫	原作平次	鵜藤兵衛	御手洗五郎兵衛
五	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
尾代甚三郎同心	伊丹喜之介	青山大蔵	片山三七郎	佐々木与右衛門	荷沢又右衛門	田村兵蔵	小笠原角右衛門	齊藤三右衛門	富永喜左衛門	原九郎右衛門	山本与九郎

—	—	—	—	—	二	—	八	二	—	二	七
渡邊監物組	宮崎左馬組	坂部久五郎	木造七左衛門組	中河牛之介組	伊藤右馬組	青山主馬組	近藤石見同心	永見新右衛門同心	成瀬豊後同心	水野太郎作同心	三枝源八同心
—	二	—	—	—	—	—	二	二	三	二	五
水野隼人組	牧野豊前組	坂部権十郎	牧野伝蔵組	井上清兵衛組	猪子久左衛門組	曾我喜太郎組	青山善四郎組	羽柴勘解由同心	溝口外記同心	内藤若狭同心	中山勘解由同心

			一	一	
			五	一	
			六	三	
			一	五	
			一	一	
			一	一	
			一	一	
		阿部孫六組			岡本奎之介紹
		今村伝四郎組			榊原左衛門組
		大橋金弥組			服部兵吉組
		市橋左京組			水野監物組
		井上主計組			久貝忠三郎組
		浅野内膳組			駒井次郎右衛門組
		桑嶋孫六組			
	以上				
	真田左衛門佐ヲ八				西尾久作討捕
	三宿越前	ヲ八			野本右近討捕
	木村長門守	ヲ八			安藤長三郎討捕
	薄田隼人	ヲ八			河村新八郎討捕

御先祖記五卷終

明石掃部 ㄨ八

下石彦左衛門ㄨ八

汀三右衛門討捕

服部伝右衛門討捕